

人権なら

2020年12月1日

第120号

NPOなら人権情報センター

●ひと・まち・生き生き

水国争闘の現場を歩く

三宅町人権学習講座でフィールドワーク

三宅町人権学習講座が10月17日にあった。第4回目の今回は現地研修を実施。吉田栄治郎さんの案内で、水国争闘の現場に立ち、当時の人々に思いを馳せながら人権学習を深めた。



コースは近鉄結崎駅—教願寺(写真)—中街道—八尾大橋—安養寺—鏡作神社—田原本駅。下永の教願寺は水平社の本部が置かれ、水平社側の人たちが集まった場所。中街道は婚姻の荷物が進んだ道。鏡作神社は国粋会の本部が置かれた場所だ。

この日は、あいにくの雨に見舞われ、急きよ車を準備。まず、教願寺で説明を聞いたあと、車でコースを回り、中央公民館を借で詳しい話を聞いた。

全国水平社と大日本国粋会が衝突

水国争闘とは1923(大正12)年3月、現田原本町八尾付近で起こった全国水平社と大日本国粋会の衝突のこと。きっかけは現川西町下永の住人の婚姻の荷物が運ばれている際、八尾の住人が同居人に誰の荷物かと聞かれて、指を4本出したことにある。

その場に居合わせた者が水平社に報告。約40人が指を出した者に抗議に出かけた。これに対し国粋会幹部が仲裁に入るものの、交渉は決裂。どちら側も応援を要請し、武器などを調達して騒動は大きくなっていった。騒動は地元住民も巻き込み、4日間にわたって続いた。最終的には奈良県知事も動き、警察部

長の立ち合いで両者は和解した。

事件後、反差別から反権力・反体制へ

吉田さんは、時代背景として水国争闘直前に差別事件が頻発していることや、全国水平社が結成されたことで社会的緊張が急速に高まったことを指摘する。

全国水平社側は事件後、反差別から反権力・反体制へ傾く。社会は社会主義への拒絶に共鳴し、水平社に対しては「嫌悪から恐怖」に変わり、目覚めた部落民への反発として差別意識を深めていったと説明した。



また、水国争闘を差別事件としてだけ見るのではなく、その背景にある利害関係や、社会状況などを推察しながら考えることが、今後の部落問題を考える上で大事なことではないか、と提起した。

山下力さん聞き取り作業が終了

石元清英さんによる山下力さんからの「聞き取り」作業は、これまで6回、行われた。初回は6月22日、2回目は7月6日、3回目は7月20日、4回目は8月17日、5回目は9月19日、6回目は10月5日に、それぞれ実施。作業はこれで終了となった。



現在、テープ起こし作業に取り掛かっている。聞き取りの構成や、編集、整理は、引き続き石元さんが担う。順調に行けば、来春に冊子として発行できる見込みだ。併せて、運動史料の目録整理作業も進める。運動史の編纂をめぐる基本方向も論議していく。

カンボジアからリモート報告

古川沙樹さんが三宅町人権学習講座で

三宅町人権学習講座が11月17日、中央公民館であった。町民や町職員が参加。NPO法人サンタピアアップ代表の古川沙樹さんと副代表の中尾将也さんがカンボジアの話をした。



古川さんは今、カンボジアに住み、貧困層の子どもたちへの就学支援をはじめ、学校教育への支援活動に取り組んでいる。カンボジアの子どもたちの笑顔に惹かれ、ボランティア活動を続ける。三宅町の出身で、コロナの影響で帰国が叶わず、今回、会場とリモートでつなぎ出演。カンボジアの概況と、自身の活動の地であるポイペトの状況について報告した。

子どもたちが作ったミサンガを買い上げ

古川さんは大学生のとき、カンボジアを初めて訪問。子どもたちの置かれている厳しい状況に接して、泣いてしまう。そのとき、逆に子どもに慰められた。再度、大学の仲間と訪問したとき、子どもたちのたくましさや笑顔に惹かれた。

大学卒業後、精神福祉士として就職したが、カンボジアを忘れることができない。「1年だけ」と親を説得。カンボジアに渡った。現在、カンボジア料理と日本料理の「国境食堂 HARU」を営業し、支援を続けている。

子どもたちは生活を支えるために働き、学校に通うことが難しい状況にある。そこで、子どもたちに必ず学校に通うという約束で、ミサンガを作ってもらい、それをサンタピアアップが買い上げ、代金を支払う。

この取り組みによって、昨年、9歳のころから支援してきた子どもが、プノンペンにあるアメリカ系の大学に特待生として進学できることが決まった。

このほか、生活水が飲み水に適していないため、支

援をしている11の学校に飲料水の配布もしている。

人々が集えるサンタピアアップハウスの建設へ

中尾さんは、昨年、カンボジアへのスタディーツアーを企画したことや、サンタピアアップハウスの建設に向けた取り組みについて説明した。サンタピアアップの活動地は今、土地が買い占められたり、自然豊かな村の真ん中にカジノが建設されたりしている。目まぐるしく変化しているのだという。



古川さんは、サンタピアアップハウスを子どもたちや村の人たちが集え、日本からみんなが来たときには一緒に集える場所にしたい、と抱負を語った。

参加者から質問も出た。古川さんを知る人たちは「元気にしてる?」「久しぶり」と声かけをしていた。



式下中学、東吉野中学とも

古川沙樹さんは11月4日には式下中学校と、6日には東吉野中学校と、それぞれリモート講演した。この企画は昨年来から、準備。コロナ感染拡大で断念



の恐れもあったが、「何とか実現したい」との先生たちの思いに、多くの人たちの協力もあって実現した。式下中学は古川さんの卒業校。2年生3クラスの96人が参加した。東吉野中学は全生徒22人が参加した。

両校の生徒たちは、古川さんのカンボジア、ポイペトでの活動や、支援している学校や地域(村)、市場などの映像を交えた話を熱心に聞いた。古川さんは生徒たちの質問にも応答した。話を聞いた生徒たちの思いや感想は後日、古川さんに届けられる。



奈良町の地域と生活を学ぶ

県民歴史講座がフィールドワークを実施

第5回県民歴史講座が11月10日にあった。「奈良町の地域と生活」をテーマにフィールドワーク。深澤吉隆・県立同和問題関係史料センター所長(写真)の案内で、興福寺南大門跡など、奈良町にある数々の史跡を巡り歩いた。



奈良町一帯は鎌倉時代から室町時代にかけて、興福寺周辺に南都七郷、東大寺周辺に東大寺郷、元興寺周辺に元興寺郷と呼ばれる集落ができ、町並みを形成した。町場とその周辺には、呪術的な力を持つと信じられ、キョメの役割を担う集団が登場した。

奈良町は江戸時代になると、幕府の直轄領となる。行政は奈良町奉行が担う。町は酒・墨・武具・団扇などの生産が盛んになり、現在に続く観光の町となる。

鹿の角切の役を担った被差別部落の人たち

日本聖公会奈良基督教会では、アイザック・ドーマン(牧師)と米田正太郎について説明。米田は奈良市内の被差別部落で生まれ、ドーマンの勧めで1895(明治28)年、アメリカに留学。のちに京都帝国大学の社会学講師になり、「日本の社会学の父」と呼ばれた。



興福寺南大門跡(写真)では、同寺で催される「薪御能」の「般若の芝」について説明。猿楽座や、観阿弥、世阿弥に対する蔑視や賤視に触れた。また、奈良奉行、川路聖謨(かわじとしあきら)の人柄や活動について説明。川路の日記『寧府記事』に多くの被差別民衆との交流があったとの記述を紹介した。

菩提院大御堂(写真)では、鹿を春日明神の使いと

する信仰とともに、「上鹿」として手厚く保護されていたという「三作石子詰め」(鹿を誤って殺し処刑された)伝承が語り継がれている。角切は被差別部落の人たちの役とされ、代償として「角」を下げ渡されていた。

「奈良饅頭」の考案は中国からの来日者

漢国神社の一角には、林神社と呼ばれる小さな社殿が鎮座する。室町時代の初め(1350年頃)、中国から来日した林浄因を祀っている。中国の「マントウ」に工夫を加え、小豆から作った餡を包んだ「奈良饅頭」を考案したと言われている。



「ならまち」を歩いていると、至る所で、さまざまな人々がそれぞれの時代の中で生活していた営みの情景が立ち上がってくる。興味深い地域だ。

古の人見つめ上つ道を歩く

反差別・人権交流センターがフィールドワーク

反差別・人権交流センター「絆」は11月14日、「上つ道を歩くー黒塚古墳から大和神社ー」をテーマにフィールドワーク。23人が参加した。案内は吉田栄治郎さん。毎年、この時期に実施。今回で9回目だ。



コースは、JR柳本駅から上つ道ー黒塚古墳(写真)・展示館ー五智堂ー淳名城入姫(ぬなきいりひめ)神社ー大和神社お旅所(中山大塚古墳)ー中山郷墓ー大和(おおやまと)神社。終了後、昼食交流した。

吉田さんは大和神社の祭礼「ちゃんちゃん祭り」での芝銭の徴収について説明。「差別は貧困や低位などの社会的・経済的理由によって発生するものではなく、〈ケガレ〉除去を担うことによって発生(そのように見なされる)」と述べ、社会のありようと人々の関係意識を考えることが重要だ、と提起した。

遺骨保管を認めた京都大学

琉球遺骨返還請求訴訟で第7回口頭弁論

琉球遺骨返還請求訴訟の第7回口頭弁論が11月19日、京都地裁(増森珠美・裁判長)であった。

普門大輔・弁護士が、原告の亀谷正子さんの先祖

につながる

「明姓世系
図一覧」や
先祖の位牌、
亀谷さんの
親族が管理



する墓の調査報告書、亀谷さんの戸籍を証拠として提出。「亀谷さんの系統調査の結果、同女は第一尚氏の子孫であることを確認できる」と主張した。普門弁護士は、琉球王朝の第一尚氏が祀られている百按司(むむじやな)墓を訪れ、撮影し、調査している。

一方、被告の京都大学側は、京都帝国大学の研究者だった三宅宗悦が本部町の古墓から収集した遺骨の保管を認めた準備書面を提出。だが、収集行為は必要と考えられる手続きを経て行われた、として違法性を否認。そのうえで、原告は祭祀継承者ではないの

編集後記 ★★★★★★★★★★★★

「諦めない」。社会運動に関わる人たちは負け続けても、こう言い続ける。一方で、権力者たちが民意に背き、必死にしがみつく光景が目につく。大差がついても敗北を認めない米大統領。大阪市長を廃止NOを再度受けても「都構想」に近い制度改革を企む市長。沖縄の民意に反しての辺野古埋め立てや、脱原発の大勢に逆らう再稼働。コロナ感染が拡大中でも、GoToの継続や五輪の開催に励む人たち。いずれも、民を愚弄して権力を乱用し、自らの特別権益の維持拡大に躍起となっている。私たちは、分断・対立を煽って仕掛けてくる様々な企みに抗い続けよう。諦めてはいけない。

で遺骨は返還できない、とした。

公判後、京都御所内で報告集会があった=写真。丹羽雅雄弁護士団長が「公判後の進行協議で裁判長が『遺骨返還は民法上の問題。次回までに百按司墓の祭祀継承者は誰なのかを整理せよ』と言ってきた。普門弁護士が調査したDVDを法廷で上映して立証したい」と述べた。このあと、原告の金城実さん、亀谷さん、松島泰勝・龍谷大学教授が決意を語った。

今回は来年2月26日午後2時半から。

柳原銀行記念資料館を訪ねて

11月19日、柳原銀行記念資料館(写真)に行っ

て来た。同館はJR京都駅から徒歩10分ほどの場所にある。同銀行は1899年に被差別部落の住民によって設立された日本で唯一の銀行だ。皮革業者らに融資を行い、産業の育成・振興に貢献した。



この日、同館スタッフの奥山典子さんと山本栄子さんに会って、運動との出会いや、解放運動と、その中で見つけたもの、大切にしたいことなどを、約1時間、話し合うことができた。奥山さんと連れ合いの高英三(コウ・ヨンサン)さんとは、「在日朝鮮人共闘」結成(1989年)に向かう過程で出会った。何度か自宅にも伺い、濃密な時間が持てた。その後、会えずじまいで来た。高さんは2003年に47歳で亡くなった。帰り際、家族、地域の仲間が作った『断固たる自分・高英三という生きざま』(編集委員会)を頂いた。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター

〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/